

# 豊岡偉人伝 15

私たちの暮らしの発展に尽くし、近代日本の礎を築いた人、スポーツ・芸術の普及発展に心血を注いだ人など、豊岡にはさまざまな先人たちの心が息づいています。

その先人たちに学び、志を引き継ぎましょう。

《問合せ》文化振興課 ☎23-1160

## 道理を求め仏道を貫いた禅僧 沢庵和尚

### 沢庵和尚

(1573~1645)



#### ①出家と禅家の修行

沢庵和尚は、1573年に山名氏の重臣秋庭綱典の子として出石城下に生まれました。秀吉が但馬攻略に着手し、父綱典は戦乱はやがて但馬にも及ぶと案じ、無事に生きてほしいと沢庵の出家を考えました。

沢庵和尚自賛頂相

7年後、山名氏は滅亡し、10歳で唱念寺に入って出家し、14歳で宗鏡寺塔頭勝福寺に入り禅を志しました。大徳寺から招かれた董甫和尚は、早くから沢庵が逸材であることを見抜き、彼が22歳のときに大徳寺山内にある三玄院に連れ帰りました。その後禅の修行に精進し、37歳で大徳寺153世の住持(寺一番の上僧)となりました。

しかし、無欲な沢庵はその地位に3日間しか留まらず、修行僧姿で教化活動の旅に出ました。

#### ②紫衣事件から流罪へ

1627年、幕府は、後水尾天皇が従来の慣例どおりに大徳寺の十数人の高僧に紫衣(※)着用の勅許状を与えたことを法度違反とし、紫衣の取り上げを命じました。つまり幕府の法度は、天皇の勅許にも優先することを示したのです。これに反発した沢庵は京に上り、大徳寺の責任者であった玉室和尚、江月和尚と共に幕府に抗弁書を提出しました。この行為が幕府に反するとして沢庵たちは罪に問われ、沢庵は出羽国上山に流罪となりました(沢庵57歳)。配流先の上山藩主は、沢庵の権力に屈しない生き方と「心さえ潔白であれば身の苦しみなど何ともない」とする姿にうたれ、草庵(春雨庵)を寄進するなど厚遇しました。

※紫衣 紫色の法衣や袈裟をいい、高德の僧尼が朝廷から賜ったもの

#### 【宗鏡寺本堂庭園】

宗鏡寺の裏山から流れ出る水を利用して作庭された池泉観賞式庭園。沢庵が作庭したと伝えられる名園は兵庫県指定文化財となっています。



#### ③家光の相談者として

1632年、2代将軍秀忠が亡くなり罪を許され、沢庵は江戸に帰ることとなりました。3代将軍家光は、剣術の指導をしていた柳生但馬守宗矩から「沢庵和尚から武芸における禅の重要性を学んだ」と聞き、沢庵に興味を持ちました。沢庵に会い、その教えに感銘した将軍は丁重にもてなし、江戸に沢庵のために新寺(東海寺)を建立し、沢庵1人のための茶会も催しました。沢庵が東海寺に住んだ7年間に将軍のお成りが75回にも及んだといわれています。

#### ④沢庵和尚の晩年

沢庵は「全てのものは天地のものであり、個人の持つべきものは何一つない、必要な時に必要な分量だけ得ればそれでよい。」と無欲を実行していたので、自分のための大寺の建立などまっぴらだというのが沢庵の心根であったといわれています。

しかし、東海寺の建立を承諾したのは、紫衣事件で凍結された大徳寺の出世問題を解決したいという思いがあったのではないのでしょうか。69歳のときに大徳寺の出世(※)の復旧・再開が申し渡され、長年の懸案が解決しました。死の間際に「夢」の一字を残し、73歳でこの世を去りました。

※出世 多くの禅僧が最終目標に掲げる儀式であり、大徳寺内外での身分を証明するもの

#### ⑤宗鏡寺(沢庵和尚ゆかりの寺)

1616年に出石城主小出吉英が沢庵の勧めで宗鏡寺を再興しました。豊岡市指定文化財の夢見の鐘など沢庵にまつわる品が



数多く残っています。沢庵は入佐山山麓の投瀨軒での営みを愛し、閑寂の生活の中で「庵居百首和歌」など、多くの書をあらわしました。

※年齢は数え年